

京都教区時報

京都教区広報委員会
(編集長 村上透磨)

京都教区本部事務局
京都市中京区
河原町通三条上る

TEL 075-211-3025

FAX 075-211-3041

honbu@kyoto.catholic.jp

Home Page <http://www.kyoto.catholic.jp> 4345

2022年 司教年頭書簡 「コロナ時代を生きる信仰Ⅱ
「キリスト者の終活を始めよう」を受けて

第7回 お誕生会

毎月、2つの幼稚園でお誕生会に参加しています。お誕生会に参加する子どもたちは、緊張しながらもどこか誇らしげです。お誕生会の前にはしおりを頂きますので、一人一人の名前を見て、どんな子どもなんだろうなあと 생각합니다。

私は30代から40代頃は普通の体調でしたが、50代を越えた今、体調が悪い日々も多く、今は車で2つの病院に通院していて、今後どうなるんだろうと思います。現実のことを考えると、体調的にも精神的にもくたびれてしまい、無理に心身とも豊かに健やかにしなければならぬと思うと、しんどくなるときがあります。

今、日曜日の夕方で、今日司式してきた教会のミサのことを思い起こしています。そして、いろんな気持ちをふりかえっていました。私にはミサ中の悪い癖があるのですが、奉献文の祈りを唱えている時に、ちらっと会衆の方を見る時があります。今日はその時に、この人たちは本当に信仰があるかと体験しましたし、キリストの死と復活を記念している一瞬なんだなと感じました。そういうば子どもたちのお誕生会でも、子どもたちを一人ずつ祝福している時は、イエス様が子どもたち

を祝福していたことを記念していると毎回感じています。

生まれた時も、子どもの時も、青年・壮年の時も、終活の時も、全て神が与えてくださった時です。

以下の御言葉を、この文章を読んでくださった方にプレゼントします。

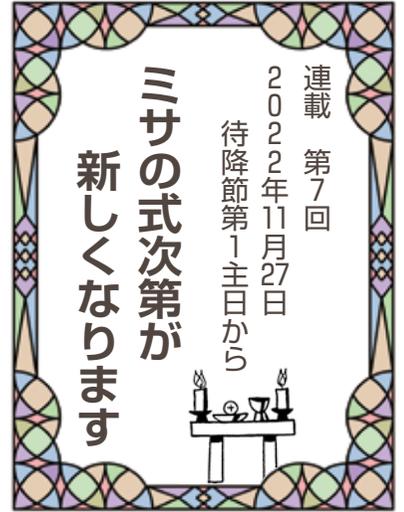
「私は神が人の子らにお与えになった務めを見極めた。神は全てを時宜に適うように作り、また永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、神のなさる業を始めから終わりまで見極めることは許されていない」(コヘレトの手紙3章10-11節)

山城ブロック担当司祭 福岡一穂



8

2022



典礼委員会担当司祭 菅原友明

今月のポイント

「神の栄光と賛美のため・・・」
これからは堂々と唱えて大丈夫!

パンとぶどう酒が祭壇の上に供えられた後、司祭が「皆さん、このささげものを、全能の神である父が受け入れてくださるように祈りましょう」と招き、会衆が「神の栄光と賛美のため、また全教会とわたしたち自身のために、司祭の手を通しておささげするいけにえをお受けください」という嘆願の祈りで応える、これがラテン語規範版の規定であり、実際に日本の多くの教会でも、かつてはこの応答がなされていたと思います。

ところが日本語現行版の注記には、司祭の招きの後、「一同は司祭とともにしばらく沈黙のうちに祈る」と書かれていて、上記の嘆願の祈りは「することもできる」という扱いでした。さらに、日本への適応として、ミサにおける沈黙が意識的に大切にされるようになってきたという背景もあり、多くの教会で嘆願の祈りは唱えられなくなり、沈黙するのが主流となりました。このため、つい昔の癖で、あるいは、自分の教会でいつも唱えている信徒が他の教会のミサに出た場合など、「神の栄光と賛美のため：」と思わず言い出してしまい、慌てて口をつぐむというような光景がしばしば見受けられます。また、司祭の招きに対して嘆願の祈りで応じたほうが自然の流れなのに、それが唱えられないという欲求不満もあったかもしれません。

このような事態に終止符を打つべく、今回の改訂では、ラテン語規範版通りに、必ず嘆願の祈りを唱えるように改められました。ですから、今後は、罪人である私達がささげるいけにえを神が受け入れてくださるようにと願う、この切なる祈りの言葉を、どうぞ心おきなくお唱えください。ただし、祈りの言葉は次の

ように変更されます。

司祭「皆さん、ともにささげるこのいけにえを、全能の父である神が受け入れてくださるよう祈りましょう」

会衆「神の栄光と賛美のため、またわたしたちと全教会のために、あなたの手を通しておささげするいけにえを、神が受け入れてくださいますように」

なお、もちろん、沈黙を大切にすることが日本への適応が撤回されたわけではありません。右記の祈りを唱えたら、「一同はその後、しばらく沈黙のうちに祈る」と明記されています。私達のためにいけにえとなってささげられていくキリストへの深い感謝がこめられた聖なる沈黙となるでしょう。この沈黙に続き、司祭は手を広げて奉納祈願を唱えるのです。



乾隆神父のイタリア留学記(10)

京都教区司祭 大塚乾隆

今回の時報の締切は6月末で、皆さまのお手元に届くのが8月ですから、4か月前のことになってしまいました。毎日の生活の中でこれと言って大きなニュースがないので、4月のことを書きたいと思います。

今年の復活祭は4月17日でした。大学は復活祭に合わせて休暇がありますので、今年は4月9日から復活祭休暇が始まりました。しかし私は、4月2日の晩(実際には3月末ぐらい?)から体調がよくなかったのです。はい、コロナに罹りました。自分なりに気をつけていたつもりでしたが、自己検査では陽性でした。のどが痛いのは「空気が乾燥している」から、少ししんどいのは「季節の変わり目」だからと済ませていきましたが、熱を測ってみると意外とあったので、コロナ検査をしたところ陽性でした。すぐに自主隔離を始めました。だれもコロナになりたい人はいません。でも、なってしまいました。そこで今回は、コロナに

なって気づいたことを分かち合いたいと思います。

思います。

・「コロナにならないよう気をつけて」という声かけほど、辛いものはありません。誰もが気をつけているけど罹ってしまうのです。幸いイタリアですから、「しゃーないな」で済ませてもらえる環境でした。日本ならどうでしょうか。私はこの時期に日本にいないのでわかりませんが、「コロナになって周りに迷惑をかけて、申し訳ない」となるのでしょうか。ですから自分がコロナに罹って思ったのは、「鬱の人や落ち込んでいる人に『頑張って』という声かけが逆にプレッシャーになる」と同じようなものではないかということ。 「なったものは仕方ない」と言えるぐらいの、ある意味で大らかさというか、ゆとりに救われました。

・一応、本業の勉強が大変だったので、身体が弱っていたのかもしれない。前職で働いていた時に疲れから肺炎になって、1週間休んだことを思い出しました。立ち止まるのが大切なんだということでしょうか。「無理はしたらあかん」ということです。そして、誰も一人で生きてはいけないということを、コレジオの仲間や他の友達からの声かけや

助けで、改めて実感しました。コロナに罹っていなかったら、部屋でゆっくり座って、窓からの景色を見ることもなかったでしょう。

・一番の恵みは、「自分のこだわり縛られない」ことに気づいたことです。先ほども書きましたが、本業は学生ですから「学校での授業」を何よりも最優先してきました。でも、それすら「何よりも大切なこと」ではなかったのです。1週間授業に行かなくても(通学して授業を受けなくても)、何とかなったのです。それにしがみついていると、他の選択肢が見えなくなりますが、なくなってみても何とかなったのです。だからこそ逆に、そぎ落としていったときに残るものが何か、探してみる機会になりました。



コロナのおかげで、部屋からの眺めをゆっくり見る余裕をもらえました。

小教区評議会役員研修会

シノドス・ともに歩む教会共同体づくり

5月28日(土)、オンラインで小教区評議会役員研修会を開催した。37小教区から約100名の役員・司牧者が参加された。

京都教区では年初より、2023年開催「第16回世界司教会議(シノドス)」・ともに歩む教会のためー交わり、参加、そして宣教」に向けて、ローマ教皇庁シノドス事務局からの質問への回答作成に取り組んできた。そこで今回の研修会では、3人の司祭から小教区でのシノドスの歩みとコロナ禍での共同体づくりについて、また、今後の教会共同体づくりについての思いを語っていただいた。

●講話1 要約

奥村豊師(三重南部ブロック担当司祭)

コロナ禍であっても、集会をやり続けなければ教会共同体とは言えないと考え、できるだけミサを実施したが、教会活動が難しくなり、朝晩の祈りやミサをオンラインで配信した。すると信徒との繋がりがそれまでと違ったものになり、また他小教区や教会以外の人との関わりが増えた。自分の何かが開かれて、新しいことに取り組んでみよう、関わりがなかった人との関係を作ろうという思いが出てきて、それが福音を伝える動機付けとなった。今まで内に秘めていた信仰の思いを言葉にできたり、信徒との関わり

りの中で見えなかったものが見えてきたり、隠された何かがこの2、3年の歩みに出てきた。神ご自身がイエス・キリストによって自己開示されたように、シノドスの歩みの中で、私たちも秘められた思いを自己開示していけば、おもしろい教会の動きができるのではないかと思う。

●講話2 要約

小立花忠師(滋賀ブロック担当司祭)

2050年、30年先の教会の姿を想像し、何が大切かを考察してみると、共同体づくりは「人」という言葉に尽きる。人を大事にする共同体である。コロナ禍という経験を通して、教会活動で必要なことと、必要でないことが分かり始めた今、新しい共同体づくりに取り組むチャンスである。人が共同体を作るのであり、一人一人が互いを大切にすることが求められている。共同体の中で孤独を感じる人がいる。イエスはそのような人に寄り添う活動をされたのではなかったか。愛に結ばれた共同体こそイエスの教会であり、教会の本質だと思う。部会などの教会活動も「人」を大切にするとこの視点で捉えて欲しい。教会が新しくなるチャンスである今、教会活動も信仰に基づく活動へと変わるように促されている。信仰の力をいただきながら歩む共同体でありたいと願う。

●講話3 要約

菅原友明師(洛東ブロック担当司祭)

コロナやシノドスを通じて「ミサ」について強く考えさせられた。週1回、ほ

んの1時間でも、教会がこの場所にあり、ミサが捧げられることがどれだけ尊いことかと思わされる。教会が何十年もの間、ともに歩みミサを続けてきたことによって、培われてきた教会の底力を感じている。今、教会は低迷しているといわれるが、私たちが教会を維持して、毎週1回ミサや集会祭儀を続けることは、ザビエルの宣教や、日本二十六聖人の殉教にも匹敵するような、大切なかけがえないことであり、私たちは立派に低迷期を支える使命を果たしている。そのような自信と誇りをもつことが、シノドス・ともに歩んでいくうえでわたしたちの方向性になるのではないか。

以上の講話を受けて一場修師(福音宣教室担当司祭)は「3人の司祭が、それぞれにコロナ禍の中にあつた時のしるしを読み取り、司牧しようとしている。異なった視点の話でも一つのところに収束していく素晴らしい分かち合いだった」とコメントした。

最後に大塚喜直司教は「教皇フランシスコが呼びかけられた『ともに歩む』ことの深い意味、そこからの気づき、聖霊の働きをより一層感じながら、全世界の教会と共に京都教区もその歩みを深めていきたい」と語り、研修会を締めくくった。

(文責・福音宣教室)



あの日は晴れていた
1945年8月15日

皇の終戦の詔(玉音放送)がラジオから流れた。日本は敗けたのである。皆、泣いていた。しかし、私は晴れた気持ちで空を見上げていた。「ああ、これでこわいことは終わった。自由になった」と思ったのである。小学校1年生、7歳のことである。

戦時中も私たちは毎晩、父を中心に(父がいなければ母が)夕の祈りを唱えていた。信徒としても教会の中心的存在であった父は、警察の取り調べを受けたことがある。母は子ども達に「お父ちゃんのために祈りしようね。今晚帰って来られへんかも知れへん」と言った。その時、私は、信仰を保つことは「命がけ」のことだと教えられたのである。それはまた、信仰がいかに尊いものであるのかも教えてくれた。

戦後77年、戦時中カトリック信者だった人は皆無となりつつある。戦争中のことを知るには、書かれた資料に頼る外はない。日本の現職の司教様たちにも、戦争の体験者はいらっしやうらなくなつた。当時の信仰体験を的確に語る人はだんだん消えていく。7歳だった私では、「語る資格はない」と思われるかもしれない。

8月15日、聖母被昇天を祝う。だが、聖母被昇天が大祝日に定められたのは、大戦後の1950年、ピオ十一世による。とはいえ、世界の平和を、平和の元后である聖母に祈り求めたい。特にウクライナとロシアに平和がありますように。



広報委員会担当司祭 村上透磨

今春から社会人になり、苦手なものリストに「手続き」が追加されたもときです。とはいうものの、実習が9月まであり、自分がやりたい仕事はまださせてもらえないので、就活中に思い描いていた社会人には、まだなれていません。明日にでも実習終わったらええのになあ〜とか、同期たちと言いながら、10月を待っています。

そんなことを言い合える彼らと過ごす休日は、とても充実しています。まだ学生の様なノリで出掛けたり、愛知県出身の同期が多いため、美味しいご飯屋さん案内してもらったりと、学生の頃より周りの人と密に関わっている気がします。

さて、気付きましたね。はい、春から私は愛知県に住んでいます。愛知県の真ん中らへん。都会すぎず田舎すぎず、住みやすくていいところですよ〜。

せっかく愛知県にいるので、今後は名古屋教区の青年活動にも、ちょこちょこ参加してみたいですね。行けたら近くの教会にもお邪魔したいな〜とも思っています。もちろん、京都教区の活動にも、仕事次第ではありますが、これまで通り関わっていくので、またどこかでお会いしましょう！

運営委員/西院教会 栗井 幹

つながりネットワーク 聖めようコミュニケーション
京都カトリック青年センター

青年センターは、教区を越える青少年活動について
京都教区の窓口となるとともに、京都教区内の各教会、
青年の各種活動をバックアップするための機関です。



← 青年センターのHPも見てね!

青年センターあんでな

大塚司教の予定

最新の情報は京都司教区のホームページにてご確認ください。



8月のお知らせ

教 区

正義と平和協議会

第15回 戦争と平和写真展
「沖縄・フクシマ・アフガニスタン」

ペシャワール会より
写真提供・ビデオ上映あり

日 時：6日① 15:00～20:00
7日② 7:00～15:00

会 場：河原町教会 ヴィリオンホール
入場無料
問合せ：075(366)6609㊦㊧

信仰教育委員会

教会学校研修会

日 時：27日① 10:00～12:30
講 師：大塚 了平師(福岡教区)
対 象：教会学校リーダー、大人の信仰
教育に携わっておられる方、お
よび18歳以上で教会学校の活動
に関心のある方

問合せ：メールまたはFAX
メール/shinkoukyoikuinkai@gmail.com
Fax/075(366)6679

案内・申込方法は各小教区あて、一斉
メールにて配信済

広報委員会

教区時報の10月号の原稿締切日は8月22日②
です。

点訳版「京都教区時報」〈無料〉ご希望の方は『カ
障連大阪フレンドリー点字部』嶽崎(たけざき)
裕子さんまでお申込みください。
Tel・Fax/079(431)8601

ブロック

奈良ブロック

オンライン聖書講座(全5回)
「今、愛を生き『いのち』をつなぐ
—ルカ福音書に学ぶ—

第5回「救いの時、恵みを知る」
講 師：大塚 喜直司教
6日① 9:00

京都教区HP、奈良ブロック
HPから、どなたでも無料で
9月5日まで視聴可能



諸 団 体

心のともしび

ラジオ番組案内

(全国34局で放送)

KBS京都 ①～⑤ 朝5:55

① 朝5:15

ラジオ関西 ①～⑤ 朝5:00

② 朝6:05

8月のテーマ「ときめき」

ホームページもご覧ください。

<https://www.tomoshihi.or.jp>



京都キリシタン研究会

都の南蛮寺跡記念ミサ

日 時：28日② 14:30

場 所：ウィングス京都

(京都市男女共同参画センター)

2階セミナー室B

京都市中京区東洞院通六角下る

内 容：14:30 研究発表・ミヤコの南
蛮寺について

15:30 ミサ(司式：ホルへ師)

16:20 ミニ巡礼(希望者)

事前のお申込み要 定員30名

新型コロナ感染防止対策のこと

コロナ感染状況により変更の場合あり

申込・問合せ：古澤 吉次 090(2381)4630

